

海外移民の奨励【その4】

～新しい移民先を求めて～

移民の決断は慎重に

在駐サンフランシスコ日本国領事館が外務大臣へ提出した報告書では、「厳格な手続きや検査などがあることをよく知らないまま、多額の賃金目当てで移民を希望する人がいることは問題である」と指摘しています。

これをきっかけに、移民を進めてきた行政側にも変化が生まれます。明治32年11月の『八女郡是』では、

東洋ノ雄邦タル我帝國臣民ノ進取的勇氣ハ凜烈トシテ、全世界ニ表彰セラレツトアリ云々

とべた褒めだったのに対し、明治41年5月の『下廣川村是』では、

此事タルヤ、一朝事ヲ誤ラハ臍ヲ嚙ムノ憂ヒアラン。実ニ輕挙ニ処ス可カラス、宜シク一村ノ經濟一家ノ生計等ニ鑑ミ、後日其方針ヲ誤ルルナキ様、大ニ熟慮考究ヲ要ス

と、移民について慎重に考えて決断しなければならぬと強調しています。

移民がもたらす経済効果

『八女郡是』の第二回（明治44年）によると、明治31年時点で、八女郡出身の出稼ぎ人は50人いました。13年後は813人に増え、送金は年間50000円から4万5000円余りに増加しています。

日米間で自主的移民制限

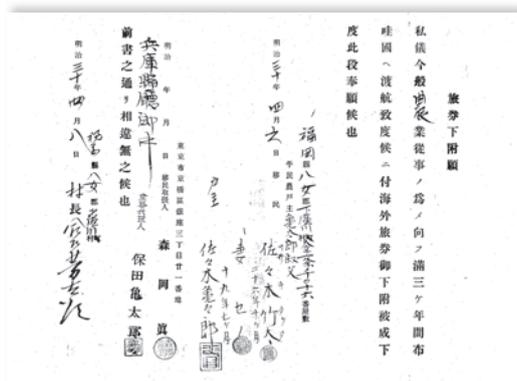
明治40年11月16日、米国の国務長官は駐米日本国大使へ、労働者の渡航をより厳重に制限することを要請します（紳士協定）。このころから、排日感情が強いアメリカから、人種偏見の少ないメキシコやペルーへ、一部の人が再移民しています。

ブラジル移民第一陣が 出航

このような国際情勢を背景に、皇国移民会社が募ったブラジル移民の第一陣、笠戸丸が明治41年4月28日に神戸港を出航します。乗船者は158家族783人。その大半は鹿児島県、福岡県、熊本県と、西日本の出身者が占めていました。この時期のブラジルは、

染色研究を目的に渡航

ハワイへの移民（出稼ぎ人）もブラジルへの移民も、農業従事者として働くことが目的でした。しかし明治34年、藍染業従事者2人が染色研究のため、自由移民としてサンフランシスコへ渡ったと記録に残っていることも特記しておきます。



移民希望者が出航予定地の県庁に提出した「旅券下附願」

広川町古墳資料館だより

来年の干支は「子」。ネズミは、弥生時代の農耕社会から人々と熱いバトルを繰り広げていたようです。

弥生時代の人々は、収穫した食料や道具類を高床式倉庫に保管していましたが、その柱には直径約50cmの円形の板「ネズミ返し」が設けられていました。「直進して障害物に当たると向きを変える」というネズミの習性を利用して、倉庫内の穀物を守ったものです。当時の

人々もこのネズミの習性を知っていたということになります。

ネズミの骨は小さく、実際の遺跡からは発掘されにくいようですが、報告書によると大型のクマネズミや小型のハタネズミなどがいたようです。

大切な食料を守るために努力した人とネズミの関係には、興味深いものがあります。

